



未はす
たつば
標り
標。町



第二十九弾 お師匠さんの人情街編

“一見さんお断り”という
何か冷たさを感じさせる習慣が
現在も生きているこの町。
しかし、この町には今でも
どこよりも人情を重んじ、
大切にふるまう風情がある。



常磐津一三太夫

1930年生まれ。本名・鷺見鶴三。歌舞
伎の踊りの際、演奏の歌唱を勤める常
磐津会の一員。現在は関西中心に舞台
をこなす。紙團「えん」のオーナー。



「あつ、お師匠さんや」花見小路界隈を歩いている舞妓さんは、お師匠さんを見つけると必ず笑顔で話し掛けてくる。舞妓さんのみならず、この界隈でお師匠さんを知らない人はいない。



雁手通にある傘の老舗「辻倉商店」の和傘は芸子さん、舞妓さんの御用達。



祇園で有名な寿司屋「おい山」もお師匠さんは醋飯染み。「お師匠さんお茶でもいかがですか」と奥から気軽な声が掛かる。



白川南通にある吉井第の有名な数珠。「かにかくに紙置はこひし響るときも枕の下を水のながるる」



白川南通と新橋通の交差点にある巽巳大明神は、この界隈の守り神。お師匠さんも散歩のときはいつもお参りする。



北野さんの境内の中の石畳や梅の木は体の弱かったお師匠さんが、子供の頃唯一遊んだところだ。



北野天満宮・上七軒界隈はお師匠さんの幼少の頃とは少しも変わらない風情を残している。

京ごころ

親しまれて幾千代。都に息づく
八ッ橋の妙趣ここにあり。



さわやかなニッキの香りと上品な風味をもつ、京の銘菓八ッ橋。筑紫守の祖八ッ橋橋本屋(つばしりんごう)に由来する。この由来説は今ではすっかり定着しているが、それまでは三河の八ッ橋の美談をうつつしたものと、この説が唱えられていた。そこで、井筒八ッ橋本舗の先代社長津田吉治郎が第一回の八ッ橋検校の供養を、そののち、先代の遺志を継ぐ現社長佐佐木隆のひたむき供養の継承により、「検校」説は一般化する。

八ッ橋検校は、作曲に専心していた頃、黒谷の近くに住んでいたといわれる。朝露けむるある朝、顔を洗いに井筒へいくと、日頃、世話になっている茶店の主人治郎三が米をとい

ていた。それを目にした検校は、とぎ汁を捨てるのはもったいないと思ひ、密に柱皮末を加えて堅焼きをつくるよう教えた。これが八ッ橋の原形である。そして貞享2(1685)年、検校がその生涯を閉じると、黒谷墓地に葬られた。墓には検校を慕った人びとの姿が絶えなかったという。やがて墓参に訪れる人びとへの記念として、茶をかねたつた堅焼きセンベイが「八ッ橋」と名付けて売り出されたといわれる。

井筒八ッ橋本舗

紙巻店 京都市東山区川端通四条上ル

☎(075)531-2121(代表)
営業10:00AM-10:00PM
年中無休



赤いすいば たのびば 標の町

「八坂さんや新橋通り、それと四条から南は昔のままでしたけど、この界隈の町並は昔と比べると、ぎょうさんビルが増えてずいぶん変わりましたわ」
お師匠さんが20年振りに祇園へ帰ってきたのは8年前。25歳で東京の歌舞伎の踊りの演奏を始める歌唱として、歌舞伎座、国立劇場、新橋演舞場、浜町明治座と毎年毎月忙しく舞台をこなしているうちに、いつの間にか20年という歳月が過ぎていたという。

お師匠さんは、15歳の頃からこの祇園の花見小路に住んでいた。その頃の町並みは、今も僅かに残る紅殻格子によしずを垂らした2階建ての町屋がほとんどで、軒を連ねて独特の風情を醸し出していた。

「当時は、珍しいもんを炊いたらもっていったり、こちらがいたいだいたりと肩を寄せあつて生きていたという感じがありませんでしたわ。人情が感じられる町でした、それは昔から。」

近所に舞踊や芸を重んじる芸子さんや舞妓さんが行き交うお茶屋さんの多いこの界隈。ここで育つたお師匠さんは、この町の雰囲気と南座で見た歌舞伎に始めて感銘を受けた17、18歳の頃、邦楽の世界へ魅了されていった。

「私は幼い頃から大人の世界に興味をもつた、ませた子供でしたわ。歌舞伎に興味を持つ前からお茶の世界に入り込んでましたし。」

お茶は、8歳の頃に既に大覚寺の池の船の上で聞かれたお茶会のお手前を

して、後に先代の茶道の家元に名前をいただいたほど。幼い頃、病弱だったせいか近所の子供たちと遊ぶよりもこういった大人の芸ごとに興味を抱くことが多かったという。

お師匠さんのこういった性格と当時の祇園のもつ独特の雰囲気が見えない緑でむずび付き、お師匠さんを邦楽という芸の道へ歩ませたのかもしれない。もともと祇園という町の名は八坂神社の前称である東山の祇園社(祇園感神院の略称)に開かれた門前町として始まる。今も独特の風情と習慣が受け継がれた代表的な京の顔を感じさせ、毅然とした雰囲気とその界隈に漂う。

だが、お師匠さんのいるこの祇園の雰囲気は単に八坂神社の門前町という歴史から生まれたものではない。実はいくつもの時代を越えて、なお悠然と流れる鴨川の河原との関係がその雰囲気のパースをつくりだしたのだ。

昔、鴨川の河原では京の社寺の勧進興行として、田楽や猿楽といった芸能が行われていた。そんな影響からか、やがて歌舞伎の創設者・出雲阿国がこの地に定着して芸能をおこなうのだが、このことが後に多大な影響を残したのである。その当時、男装した阿国独特の踊りは時の権力者たちに風紀を乱すものと嫌われ、踊る場所を追いやられていた。そして踊りを唯一許されたのが四条河原の地だった。ここは厳しい取締で行き着く先の成れの果てと思われたが、ここでも阿国の歌舞伎踊は人気を呼び人を呼んだ。この評判が巷に広がると、観衆だけではなく、その人氣にあやかろうと人形浄瑠璃や曲芸、軽業といった様々な芸小屋が後を追うように立ち並び、この四条河原はいつのまにか芸能の地として定着し、繁栄していったのである。

こうして四条河原が芸能の地として定着する頃になると、それを見にきた客相手に水茶屋と呼ばれるお茶屋が立ち始めた。これが祇園のお茶屋のはじまりである。やがて、河原で行われた



祇園は錦手通にある「千子」。お師匠さんはこの美人ママと舞妓の情から情願染み。



祇園の数あるお茶屋さんの中でも「みの家」は、お師匠さんの古くからの情願染み。



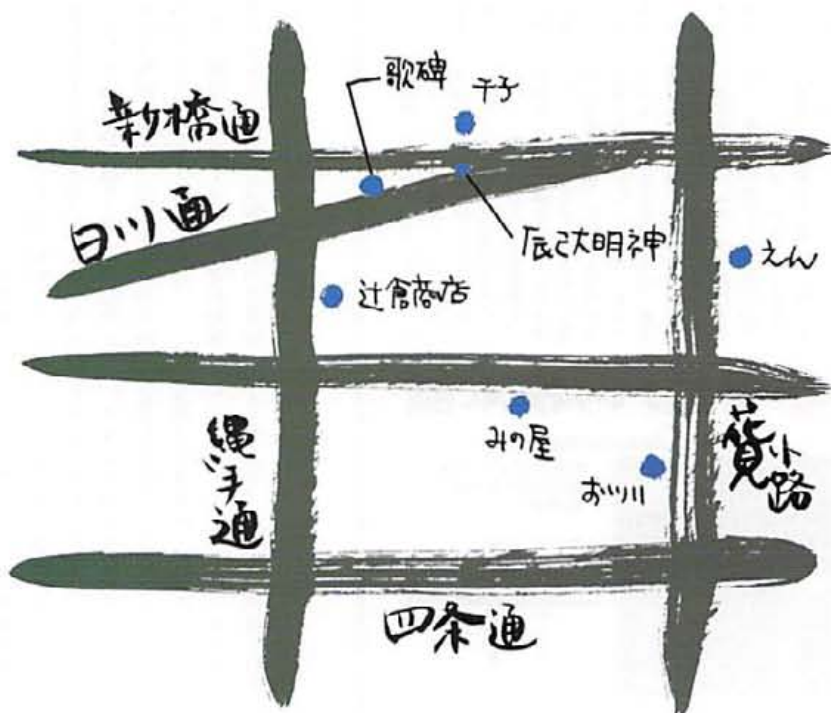
お店の前にある地霊の碑。地元を大切にするお師匠さんの心がこんなところにも表れている。



温厚で優しいお師匠さんは、すべての社寺仏閣に手を合わせ、どんなときでも感謝の念を忘れない。



祇園の厚い人情を知るお師匠さんが出したお店「えん」。この名には、みなさんのご縁を深めまじょうという意味が込められている。



赤いすまじりば 知れり町 標。

芸能は時代の流れとともにお茶屋のお座敷でおこなわれるようになり、地方にある門前町とは違う独特の雰囲気がある。こうして祇園に誕生していった。

こういつた歴史的背景から見ても、お師匠さんが歌舞伎に魅了されて邦楽の世界へ入っていったのは、祇園で育ったという縁が結んだものと不思議に考えられる。

そういえば、祇園の縁を重んじる習慣に、一見さんお断り。というものがある。これを端的に考えて、縁を作らないというような意味と受けとり、祇園は冷たい町。と思う人が少なくない。

だが、お師匠さんにいわせると人情があるから、こそという。

「お茶屋さんを始め、昔からある祇園のお店が、一見さんお断り。にしているんは、この町に人情がないんやのうて、人情がなければやっていけない町やからそうしているんや思うんです。それ

は鼻屑にしてくれはるお客さんに不愉快な思いを絶対させないことをお店の雰囲気づくりとしはるから、雰囲気を知らないお客さんには遠慮してもらってらんや思うんです。」

祇園は前にも述べたように、もともとは軒先を連ねた町。だから隣り合った深い人間関係を大切にしている習慣がその根底にある。鼻屑にしてくれはるお客さんに不愉快な思いを絶対させたくないという店づくりも、商売を越えた人間関係を重んじるからこそである。

この界限の人情を表すも形といえよう。このようにに祇園での商売の基本は、ものを売るより先に人間関係ができてくることとしている。これはその人間的にお付き合いできるお客さんを大切にすれば、またその客が縁となって新たな人間関係をつくりだすから。

つまり、祇園という町では人情を人間関係の縁を第一とするから、一見さんお断り。という習慣が生まれたのだ。

「この界限にビルが増えてから、お茶屋を料理屋や酒処に転向するお店も多くなりました。けど、もともとは昔からいる人がほとんどやから、長いこと東京におりましたけど、帰ってきたときも前と変わらぬ人情がある町や思いましたなあ。帰ってきたてすぐは近所の若い芸子さんや舞妓さんは私のことよわからんようやうたけど、お茶屋のお母さんたちは私のことよ知ってましたから今はもう、お師匠さん。と声かけてくれます。ここは、暖い町なんですよ。」

確かにこの祇園界限をお師匠さんと歩いていると、舞妓さんはもちろん筋のあちらこちらの軒先にいる人たちがそれぞれ「お師匠さん、こんばんわ」と暖かな挨拶をしてくる。お師匠さんもそれに応えて丁寧に挨拶を交わす。全国的に都市化が進み、忘れられ

うとしている近所付き合い、出会いの挨拶といった基本的な人情の触れ合いが、暖かさが、この祇園では昔の姿のまま生きている。

「ここに戻ってきたてお店をやるとなると嬉しいことは、視野が広まっていろいろな人とお付き合いできるようになったことですね。東京にいるときは、芸一筋で役者と舞踊の先生といった付き合いしかなかったですから。」

年々祇園界限には派手なビルが立ち並び、その風情のある様相は変わろうとしている。だが、祇園に住む人たちの人々との触れ合いを重んじる性格は、今も昔も変わらない。お師匠さんの店の名の「えん」は、そんな祇園のこころの人情を表したものののだろうか。

文/小宮山 祥広
写真/大田 メツミ



皆にないものねだりされる審判は スポーツにおける唯一の被害者か

西崎修平



セ・リーグ審判団には問題が多いらしい。サッカーでは身分がアマチュアである審判をめぐって批判が噴出したし、大相撲でもきわどい一番には積極的に物言いをつけなきやいけないのなんのとまあかまびすしい。考えてみれば、ボールがラインのどっち側に落ちたか、今のプレーはルール上合法か違法か、どっちの足が先に外に出たのか、そういう当事者同士にとって大切な問題を、全く無縁の第三者が決める、つまりあるひとりの主観がそのまま客観になるのがスポーツなのだ。モメごとが起き

て当然。特にサッカーにはサポーターの他に、フリーガンと呼ばれるタイガースファンの行動力を十倍増しにしたような連中がいるのでコトが当事者同士だけではなく、社会問題に発展することだってある。そのためモメた場合外国の審判は毅然としている。選手が血の気たっぷりに抗議しても、「今、君がしていることは試合全体にとって全く無意味なことなのだよ」と、それ以上血の気の多さで狂ったように選手に教えるのが外国の審判というヤツである。通常彼らは黒子に徹した存在だ

が、ここという場面では一転して主役となる。威厳も存在感もあるのだ。そもそも互いが相手をやっつけることを目的とする行動を判定するのだから片方の利は当然も片方の不利だ。グラウンド内のムクツケき男どもが全員納得するジャッジなど原則的にはありえないと考えてよい。でも審判には100%の正確さが要求されている。ありもしないものを追いかけてせられて、間違えると叱られるのが審判。そう思っただけでスポーツ観戦を楽しめば、少し違った面白さがわかるよ。きつと。